

## 太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジッドの 講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容

宮 崎 三 世

太宰治「碧眼托鉢」は、『日本浪漫派』に三回にわたって連載された。「碧眼托鉢<sup>(1)</sup>」では、「ブルジョア芸術に於ける宿命」と「フィリップの骨格について」という章で、フィリップ (Charles-Louis Philippe 一八七四～一九〇九年) という作家に言及されている。後者の中で、語り手の「私」は、「フィリップ。これは、断じて、可愛げのある作家では無い<sup>(2)</sup>」と述べている。そして「フランスのむかしの小説家の中で、畏敬して居るもの<sup>(3)</sup>」として、「メリメ」の後に「辛じて、フィリップ」と名前を挙げて、「その余は、名はなくもがなと思つて居る<sup>(4)</sup>」と言う。そして「私」は「かれのまことの人となりを語らむ乎<sup>(4)</sup>」と、「フィリップの友に語つた言葉のはしはし<sup>(5)</sup>」としてフィリップの書簡を九つ引用する。フィリップの死を惜しむアンドレ・ジッド (André Gide、一八六九～一九五一年) の言葉も引用している。その後「私」はフィリップについて、「かれこそ、厳肅なる半面の大文豪」であり、「世をのがれ、ひっそり暮した風流隠士<sup>(4)</sup>のたぐひではな<sup>(6)</sup>」く、「三千四歳で死したるかれには、大作家五十歳六十歳のあの傍若無人のマンネリズムの堆積が、無かつたので」、「巨匠たる貫禄」が「見失」われていると語っている。以上について「私」は最後に、

「淀野隆三訳、「小さき町にて。」の出版を、よろこぶの心のあまり、ひどく、不要の出しやばりをしたやうである」と述べている。<sup>(7)</sup>

「フィリップの骨格について」という章について、前田角蔵氏は、フィリップに「どうして太宰が惹かれたのかさだかではない」と断ってから、引用されたフィリップの言葉やそれに続く「私」の言葉から「類推」し、「文才は優れていながらあまり評価されなかった作家への万感の同情心があつたことは間違いないがあるまい」と読んでいる。<sup>(8)</sup>そして「ここには大作家の能力がありながらも世に受け入れられていない自分への自己愛も多分に含まれているだろう」として<sup>(9)</sup>いる。

この章では、鉤括弧で引用されるフィリップやジツドの言葉について、特に説明が加えられることがない。フィリップのどのような点が「畏敬」<sup>(10)</sup>されているのか、また「半面の大文豪」<sup>(11)</sup>とはどのようなことであるのか、明確に示されてはいない。これらがどういうことであるのかを探る必要がある。この随筆を読んだだけでは明確に分からない太宰の考えを探るためには、太宰が参照したフィリップとジツドの言葉について、その全体像を把握する必要がある。しかしこれまでに、この随筆のフィリップとジツドの言葉がどのような本に基づいて記されているか、まだ特定されていない。本稿ではまず、この随筆を書くために太宰が参照した可能性のある、フィリップとジツドの言葉の翻訳の調査結果を示す。それらとこの随筆の本文を対照させて検討することによって、太宰がこの随筆を書くに当たって何を用いたのかを特定することを試みたいと思う。

今後の見通しとしては、その引用元の本と太宰の随筆を合わせて読むことによって、太宰がどのような点を受容したかを明らかにしたいと思う。以上の作業を通じて、太宰がフィリップについてどのような点を評価したのかを、具体的に明らかにすることが目的である。本稿はその前段階の基礎作業である。

「、フィリップの骨格について」の引用元の特定——叢文閣単行本と新潮社全集の比較によって

太宰が引用しているフィリップの言葉は、どのような本に基づくのであろうか。山内祥史氏は、「フィリップの友に語った言葉」は「彼の書簡の一節」であると述べている。そして「アンドレ・ジッド」の「演説」の言葉は、小牧近江訳に依ったものだろう」として、「たとえば「シャルル・ルイ・フィリップ」『フィリップ全集第三卷』新潮社、昭和五年三月二十三日発行）など」と挙げている。<sup>(13)</sup>この章では、太宰の随筆を、フィリップの書簡とジッドの講演の本文と比較することで、太宰が見た本を特定する。

まず、フィリップの書簡集の翻訳についてであるが、「碧眼托鉢（二）」<sup>(14)</sup>が発表された昭和十一年一月までに二つ出されている。一つは昭和三年三月の外山樞夫訳『若き日の手紙』（岩波文庫）である。もう一つは、昭和四年十一月の神部孝訳「若き日の手紙」で、『フィリップ全集 第一卷』（新潮社）に収録されている。<sup>(15)</sup>

しかし、次に引用する通り、外山訳と神部訳は、太宰の随筆の引用部分とは似ていない。

太宰の随筆…これは小さい声でいふことだが、僕は、ミケランジェロと老ダンテを思ふと、からだがふるえる。  
それから、ニイチエ。<sup>(16)</sup>

外山訳…「前略」僕は極く内密に話さなければならない。僕は古馴染のミケランジェロとダンテとを、神経と意志  
との陶酔を以て眺める。それは、おゝ友よ、僕がニイチエを読んだからだ。<sup>(17)</sup>

神部訳…僕は声をひそめて、話さなくてはならない。僕は神経や意志の狂ほしさを以て古馴染のミケランジェロや  
ダンテを眺める。それは、おゝ友よ、僕がニイチエを読んだからであつて「後略」。<sup>(18)</sup>

例えば傍線部と二重傍線部のように、太宰の用いている「小さい声でいふ」や「からだがふるえる」という表現は、

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジッドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容

後の二つの翻訳の表現とはそれぞれ異なっている。また、太宰の引用では、四角で囲んだ部分のように、「それから」とニイチエの名前が付け加えられている点を見ても。後の二つの翻訳では、ニイチエを読んだことが、ミケランジェロとダンテに強く心を動かされていることの理由として挙げられており、太宰の引用とは異なっている。

次に、アンドレ・ジッドのフィリップについての講演の本文を確認してみたいと思う。この講演にはフィリップの書簡が引用されているので、太宰の随筆では、ジッドの演説の言葉だけではなく、フィリップの書簡の言葉もまた、ジッドの講演から引用された可能性がある。「碧眼托鉢<sup>(19)</sup>」までに出されているジッドのフィリップについての講演の翻訳は、第一に、大正十五年五月の小牧近江訳『シャルル・ルイ・フィリップ』（叢文閣）がある。第二に、昭和五年三月に新潮社から出された『フィリップ全集 第三巻』に、小牧近江訳「シャルル・ルイ・フィリップ」が収められている。第三に、昭和九年四月に金星堂から出された『ジイド全集 第九巻』に、片山敏彦訳「シャルル・ルイ・フィリップ」が収められている。第四に、昭和九年四月に建設社から出された『ジイド全集 第九巻』に、中島健蔵訳「シャルル・ルイ・フィリップ」が収められている。<sup>(20)</sup>

第二点目の『フィリップ全集』の小牧近江訳が、山内祥史氏によって「フィリップの骨格について」の出典として挙げられている。<sup>(21)</sup>まずこの『フィリップ全集』の本文を、第三・第四点目に挙げた『ジイド全集』の二つの本文と比べてみたいと思う。例えば、ミケランジェロ等への言及は、それぞれ次のように訳されている。

太宰の随筆…これは小さい声でいふことだが、僕は、ミケランジェロと老ダンテを思ふと、からだがふるえる。  
それから、ニイチエ。<sup>(22)</sup>

『フィリップ全集』の小牧訳…これは小さい声で言ふことだが、僕はわが老ミケル・アンジェロと老ダンテに満身の感激をもつ。  
それから僕はニイチエを読んだが、おお君、あれこそ我が悩みの良剤であり、僕を強壯にする興

奮劑なんだ。<sup>(23)</sup>

『ジイド全集』の片山訳…君にこつそり言はなければならぬのだが、僕は狂熱的崇拜をもつて、わが老ミケランジェロとわが老ダンテとを全靈のうちに仰いでゐる。<sup>(24)</sup>それは、おお我が友よ、僕がニーチェを読んだからなのだ。

『ジイド全集』の中島訳…これは小聲で書かなければならぬ事なんだが、僕はわがミケランジェロとわがダンテとに全身また全靈を以て傾倒して居る。<sup>(25)</sup>と云ふのは僕はニーチェを読んだのだ、さうすると君、それは僕の不幸を癒す薬、僕を強くして呉れる偉大な興奮劑なんだ。

まず、二重傍線部のように、太宰の随筆の「からだがふるえる」という表現については、三つの翻訳全てが一致しなかった。しかし、「小さい声で」と初めに断る傍線部分と、四角で囲んだ部分のように「それから」という接続詞を用いて、ミケランジェロとダンテにニーチェを並列する二点については、太宰の随筆と『フィリップ全集』の小牧訳の本文は一致している。片山訳と中島訳では、これらの二点も一致していない。

そこで、太宰の随筆で引用されている全てのフィリップとジッドの言葉について、『フィリップ全集』の小牧訳の本文の該当箇所を確認してみた。すると、違和感を覚える点があった。詳しくは次の段落で述べるが、該当箇所自体を見つけられなかったり、太宰が用いている独特の言葉が一致しなかったりするためである。そこで、『フィリップ全集』以前に刊行されている、第一点目の叢文閣単行本の小牧近江訳を見てみた。すると二つの本文は、同じ小牧訳であるが、全集に収められる際に改訂されていることが分かった。叢文閣単行本の方では、全集にはない該当箇所が存在したり、全集よりも太宰の表現と近い表現が用いられていないか。太宰の随筆と、叢文閣単行本そして全集の小牧近江の訳文を比較した。

太宰の「フィリップの骨格について」で、ジッドの講演に基づいているのではないかと考えられる箇所は、フィリップ

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジッドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容

プとジッドの言葉、そしてその間に差し挟まれる説明の文章である。それらを①～⑫の番号を振って分け、それぞれ該当する叢文閣単行本と新潮社の『フィリップ全集』（以下、この全集を、「新潮社全集」と略記する。）の本文を確認した。その結果を、本稿の末尾の表Aの【対照表】で示している。

まず、叢文閣単行本と新潮社全集の該当箇所の有無について述べる。叢文閣単行本の本文では、①～⑦と⑫は、「二、シャルル・ルイ・フィリップ（講演）」に該当箇所があった。⑨⑩は、同じ叢文閣単行本の中で、「三、参考」として付された資料のうち「其四 アンンドレ・ジッドに与ふ（手簡）」に該当箇所があった。⑧⑪は該当箇所がなかった。次に、新潮社全集の本文については、①～⑦と⑫は、「シャルル・ルイ・フィリップ」（小牧近江訳）に該当箇所があった。⑩の該当箇所は新潮社全集ではジッドの講演の中にはないが、同じ全集に収められている「二十歳の日記」（神部孝訳）に該当する箇所がある。⑧⑨⑪は該当箇所がなかった。以上、該当箇所の有無については、叢文閣単行本に⑨の該当箇所がある点が、新潮社全集と異なる点である。⑨の「アンンドレ・ジッドに与ふ」という部分は、ジッドの表記が「ジイド」であることを除けば、叢文閣単行本の参考資料のタイトルと一致している。

次に、二つの本に該当箇所がある九カ所（①～⑦と⑩⑫）について、表現を比べて見る。九カ所のうち六カ所（③④⑤⑦⑩⑫）で、叢文閣単行本の方が太宰の本文に似ていることが分かった。太宰の随筆で③のように「ミケランジェロ」と表記されている点について、新潮社全集では「老ミケル・アンジェロ」となっている。叢文閣単行本では「ミケル・アンジェロ」であり、「老」が付いていない点で太宰の随筆の表現に似ている。④「野蛮人」について、新潮社全集では「野人」である。それに対して、叢文閣単行本では「野蛮人」と一致する。⑤の最後の一文は、「僕には、猛烈な意志さへあるのだよ」である。新潮社全集は「毎日、僕に接してゐる友達は、僕が抵抗と勇気を持つ強い人間であり、烈しい意志を持つてゐると考へてゐてくれるのだ」となっている。叢文閣単行本では「そして僕には猛烈な意

志があるのだ」となっている。太宰の随筆と叢文閣単行本では、烈しい意志を持つという内容を最後に独立させる文の切り方と、「猛烈な意志」という表現が一致している。⑦については、「半面」と「御記憶ありたい」という表現に注目してみたいと思う。新潮社全集では「一面」、「記憶してゐて下さい」と表現されている。叢文閣単行本では「半面」、「お記憶ありたい」とされており、太宰の随筆と似た表現となっている。⑩については、「男らしく」と「立場をどつちかに、はつきりときめてくれ」という表現について見てみる。新潮社全集では、そのことが「大人に」と「選択するのさ」という異なる言葉で表されている。それに対して、叢文閣単行本では、「早く男らしくなってくれ。立場をどつちかにきめてくれ」と、太宰とほぼ同じ表現が用いられている。⑫については、「絶倫の力」という表現を比較してみたいと思う。新潮社全集では「ありあまるほどの力」と表現されている。叢文閣単行本は「絶倫の力」であり、太宰の随筆と一致している。

二冊の本に該当箇所がある九カ所のうち、残りの三カ所(①②⑥)は、叢文閣単行本から新潮社全集への改訂がないか、ふりがな等の細かな改訂にとどまる箇所である。新潮社全集の方が太宰の随筆の本文に似ている、という箇所はなかった。従って、太宰が随筆を執筆するに当たって用いた本は、叢文閣単行本であるといえる。

## 二、叢文閣単行本の本文の変更による強調

太宰の随筆では、叢文閣単行本の本文が、そのまま引用されているわけではない。太宰の随筆と叢文閣単行本の本文(表A)でいうと、最上段目と二段目の部分である。)を比較してみると、太宰は、叢文閣単行本の本文に手を加えていることが分かる。様々な変更があるが、変更の種類としては三つの種類があると考えられる。一つは、文章表現における変更である。読点を追加したり、ある言葉や表現を類似するものへ変えたり、細かい内容を削除したりする

という変更である。二つ目は、叢文閣単行本の本文に言葉を付け加えるという変更である。表Aの最下段に、これら二種類の変更点の全てを挙げた。三つ目の変更も言葉を付け加えるものであるが、叢文閣単行本に該当箇所を見つけない点で、二つ目の変更とは異なっている。表Aの⑧⑨のことである。

まず、文章表現上の変更点について見てみたい。第一に、叢文閣単行本の本文に読点を追加することが、二十一箇所で行われている。以下、丸数字の後の数字は、表Aの最下段の数字と対応している。表Aの②2.4.5.7、③1.3.4、④1.2.3、⑤6.8、⑥1、⑦1.4、⑩1、⑫1.2.4.5.6.での変更である。太宰の随筆では、全体に亘って、フィリッブとジッドの言葉が、短く切って示されていることが分かる。

文章表現上の第二の変更点として、叢文閣単行本の言葉や表現を、類似するものへ変えるということが挙げられる。①2、②3.6.11、③3、④6、⑤1.2.4.6.8、⑥3、⑦2.3、⑩1、⑫6.の十六カ所で見られる。これらの変更のうち、まず、②6.と⑤6.を見てみたい。いずれも、叢文閣単行本では一文で述べられていたことを、二文に分けて述べるという変更がされている。②6.は、叢文閣単行本では「前略」いひ得ることは、僕は將に生れんとする新らしい時代に属してゐるといふことだ」という一文であった。太宰の随筆では、この一文について、「前略」これだけは断言できる。僕は、將に生れんとする新しい時代に属してゐるといふことを」と、二つの文に切り、倒置して述べるという変更を加えている。⑤6.は、叢文閣単行本では、「前略」友達は僕は抵抗と勇氣を持つ強い人間だとしてくれるんだ」という一文が、「僕は執拗な抵抗と、勇氣とを持つてゐる。「中略」友人たちも、みんなさういふ」と二文に分けられている。これらの変更もまた、読点の追加と同様に、文章を短く切って提示しようとするものである。また、②6.は倒置することでも末尾を強調することになっている。

次に、⑥3.で、「知れない」という表現が、「知れん」というくだけた言い回しへと変更されていることに注意して



みたい。このような口語的な表現への変更としては、他に、第一の変更点で挙げたうち、②5.と⑥1.の、「僕、」という表現への変更がある。助詞を省いて口語的で勢いのある表現にしている。

語気を追加することは、⑦2.や⑦3.でも行われている。⑦2.では、「廿八歳しかない。が、私は半面をさらけ出した」という叢文閣単行本の本文に手が増えられ、「二十八歳にして、すでに僕の半面を切つた」とされている。「半面を切」というのは特殊な表現である。フィリップが自分の半面を示したということ、それを一つの達成として語っていることは分かる。「半面を切」とは、意味としては「半面をさらけ出」と同様であると考えられる。しかし太宰は「さらけ出」という表現や、半面を示したといった表現を用いることはしなかった。切るという、刃物を用いて断つという鋭さや、区切りをつけるというきつぱりした様子や、勢いなどを感じさせる言葉を用いて、フィリップが自分の「半面」を明らかにしたということを、より印象的に伝えている。<sup>(26)</sup>⑦3.では、叢文閣単行本の「他の方も見てゐて下さるがいゝ」という一文を、「もう半面のあることを忘れるな」と変えている。「他の方」と「もう半面」は、意味としては同じであるが、「半面」という言葉を繰り返し、まだ自分の全面は示していないのであり「もう半面」が残っていることを明確に述べている。また、「見てゐて下さるがいゝ」を「忘れるな」と変更している。「見てゐて下さるがいゝ」は、一見表現は穏やかであるが、切り口上で、わざとらしい丁寧なものの言い方の捨て台詞めいて聞こえる。「忘れるな」への変更は、より平明な表現で、内容としては強く要求するという同様のことを言ったものだと考えられる。

文章表現上の第三の変更点として、細かい内容を削除するということがある。例えば、②9.では、叢文閣単行本にはあった「それは恰度、」という言葉が削除されている。このような変更は十三例あり、②9.10.12.13.、③2.5.、④5.、⑤3.4.5.、⑦5.6.8.の部分で行われている。これらのうち、②の13.は、叢文閣単行本では「予言者のひとにひとしい

のだ」と述べられていたものを、「予言者」の後の部分を削除して、「予言者」と体言止めで終わっている。同様に、助動詞などの文末部分を削除して体言止めで終わるといふ例は、他にも③5.⑦5.8.に見られ、計四例がある。③5.は「ニイチエ」、⑦5.は「意欲したところのもの」、⑦8.は「僕の発條<sup>ばね</sup>」で文を終えている。

以上、文章表現上の変更点を三点見てきたが、次に、叢文閣単行本の本文に対して、言葉を加えている点を見てみたいと思う。文章表現上の第三の変更点のように細かい内容を削除する一方で、逆に言葉を付け加えることもされている。注目すべき変更点であるといえる。中には言葉を微妙に付け加えるだけのものもあるが、これらの変更は、以下で見ていく通り、文章表現上というよりも内容に関わる変更であるといえるからである。④4.、⑤6.7.8.、⑦9.、⑨1.、⑩1.で、計七例ある。④4.では、「僕も書く」という一言が付け加えられている。これは、叢文閣単行本の該当箇所の「かくして書き下ろされたのが、『ビュ・ビュ・ド・モンパルナス』である」という説明に基づいて追加されたと考えられる。太宰は、フィリップがドストエフスキー『白痴』に触発されて作品を生み出したという説明を、そのまま伝えることはしなかった。その説明を「僕も書く」という簡潔なフィリップの言葉に変えて、そのことでフィリップが『白痴』に感動し意欲を得たことを表現している。

⑤6.と⑤8.そして⑦9.の変更では、微妙に言葉を付け加えることで、フィリップの言葉を強調することが行われている。⑤6.では「抵抗」を持つているという点を、「執拗な」という言葉の追加によって強めている。⑤8.では、「猛烈な意志がある」ということを、「猛烈な意志さへある」と「意志」を強調している。⑦9.の最後では、「僕」が「半面」を「はつきりさせた」のは、「勇氣」や「力」によると主張されている。叢文閣単行本では、「それが勇氣であり、力である」と述べているのに対して、太宰の随筆では⑦9.のように「これこそ勇氣であり、力である」と述べている。「勇氣」と「力」をより強調している。

⑤7.では、「僕たちの仲で、おそらくは、いちばん強い男だ」というフィリップの主張が付け加えられている。これは、「毎日毎日僕に接してゐるところの友達に」、自分を「強い人間だとしてくれる」という叢文閣単行本の内容に、「僕たちの仲で」「いちばん」という要素を加えて、強調したものと考えられる。

⑨1.では、ジッドを「白面の文学青年」とする言葉が付け加えられている。これも、叢文閣単行本の該当箇所つまり「三 参考」「其四」の書簡の内容に基づいて追加されたものと考えられる。フィリップがジッドに宛てて書いた書簡である。この書簡を読むと、フィリップが、ジッドの「放蕩息子」という作品の「読後」に書いたものであることが分かる。フィリップはまず「放蕩息子」を読んで「がっかり」したことを述べている。そして「とはいふものの君はあんなに純に書き、あんなに明快に思索したことは今までないと思ふ」と述べ、「早く男らしくなつて」「立場」を「きめ」るようと迫っている。フィリップは、ジッドが「放蕩息子」で「純に書き」「明快に思索した」ことを評価するものの、ジッドを未熟者と見て激励している。そのことを受けて太宰はジッドを「白面の文学青年」としたのだと考えられる。

⑩1.では、叢文閣単行本の「立場をどつちかにきめてくれ」という文を、読点で短く切りつつ言葉を加えて「立場をどつちかに、はつきりと、決めてくれ」としている。フィリップがより力強くジッドに選択を迫る表現へと変更されている。

以上の点について、太宰の随筆では、叢文閣単行本の本文が変更されていることを見た。文章表現上の第一―三の変更点からは、太宰がフィリップやジッドの言葉を短く区切って述べようとしていることが明らかである。それによってフィリップやジッドの言葉一つ一つを目立たせようとしている。第二の変更点における倒置することや、第三の変更点における体言止めもまた、末尾を強調するものである。

更に、言葉を追加することによって、該当する叢文閣単行本の内容が強調されていた。強調されている内容には、ある傾向をうかがうことができる。七例のうち六例では、『白痴』に触発されて「僕も書く」と意欲が涌いたこと、「抵抗」や「強」さや「意志」や「勇気」や「力」を持つていること、ジッドに立場の決定を「はつきりと」迫る勢いが強められている。フィリップの力強さが強調されるという傾向がある。

第一の変更点としてみた②5.と⑥1.、また第二の変更点として見た⑥3.と⑦2.3.では、口語的で勢いのある表現へ変更されていた。フィリップがまさに話しているかのように、語気を追加しているということである。

言葉を付加する変更点の④4.でも、「僕も書く」と、フィリップ自身の語りが追加されていた。

太宰は、ジッドの講演で読んだフィリップやジッドの言葉を、単に引き写すということはしていない。以上の変更点からは、情報や知識をただ伝えるのではなく、フィリップとジッドの言葉を強調し語気を強めて、作家たちの言葉をリアルな生の声として示そうとしたことが分かる。太宰はこの随筆で、フィリップの発言とともに熱気を帯びた口調によって、その力強い様子を伝えようと工夫している。

最後に、太宰の随筆に、叢文閣単行本に該当箇所を見つけれない言葉があることを確認しておきたいと思う。  
表Aの通り、⑧の「なんのことはない、僕は市井の正義派であつた」というフィリップの言葉である。そして、⑪の「アンドレ・ジッドは演説した」という一文である。⑪は、⑫のジッドの言葉を引用するための説明である。⑪は特に太宰の考えが込められたものではないといえる。それに対して⑧は、太宰がフィリップをどのように理解しているかを示していると考えられる。そのため、太宰が叢文閣単行本に特に付け加えた点として、⑧は重要である。なお、「碧眼托鉢（一）」<sup>27</sup>までに発表された、フィリップについて述べた文献を調査したところ、フィリップを「市井の正義派」と述べたものは見つからなかった。（確認できた文献一覧は、本稿の末尾の表Bの【一覧表】に挙げる。）

今回は「碧眼托鉢（一）」執筆にあたつて、太宰が依拠した本を特定し、それとの比較を通して、フィリップやジツドの言葉を読者に提示する際太宰がどのような意識をもつて工夫を加えていたかを見た。次の課題は、太宰がこの叢文閣単行本からどのような点を受容したかを明らかにすることである。その検討を通して、フィリップを「市井の正義派」と呼ぶことの意味についても考察していきたい。

注

(1) 「碧眼托鉢（一）」『日本浪漫派』第二巻第一号、昭和十一年一月、70～73頁。この随筆を、以下「碧一」というふうに略記して、頁数を算用数字で示す。

(2) 「碧一」、71頁。

(3) 注(2)に同じ。

(4) 注(2)に同じ。

(5) 「碧一」、72頁。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 注(5)に同じ。

(8) 前田角蔵「太宰治と『碧眼托鉢』」『太宰治研究』第十七集、和泉書院、平成二十一年六月、248頁。

(9) 注(8)に同じ。

(10) 注(5)に同じ。

(11) 注(5)に同じ。

(12) 山内祥史「解題」『太宰治全集』第十巻、筑摩書房、一九九〇年十二月、578頁。

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジツドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容

(13) 注(12)に同じ。

(14) 注(1)に同じ。

(15) 調査に当たって、柚原貴教「フィリップ翻訳作品目録」『翻訳と歴史』三十六号、二〇〇八年一月、40頁)の「若き日の手紙」の項を確認した。外山訳については、昭和三年の岩波文庫以前に、大正十五年に『ひ新しき村』(第一巻第六号、大正十五年九月)と、昭和二年に『大調和』に四度(昭和二年四月創刊号・五月号・六月号・十二月号)発表されていた。これらのうち、『大調和』創刊号には、太宰の隨筆で引用されたフィリップの言葉の一部(本稿末尾の表Aでいうと②④)に該当する部分が含まれていた(50頁)。しかし、その本文は、岩波文庫の本文(75頁)と同じであるため、碧により時期に近い岩波文庫を用い検討する。

(16) 注(5)に同じ。

(17) シャルル・ルイ・フィリップ『若き日の手紙』、外山樸夫訳、岩波文庫、昭和三年三月、158頁。

(18) 神部孝訳「若き日の手紙」『フィリップ全集 第一巻』新潮社、昭和四年十一月、316頁。

(19) 注(1)に同じ。

(20) 調査に当たって、大場恒明「日本におけるアンドレ・ジッド文献」『アンドレ・ジッドと日本近代文学——「偏見なき精神」との邂逅』、蒼穹出版、二〇〇三年七月、98〜125頁)を確認した。

(21) 注(12)に同じ。

(22) 注(5)に同じ。

(23) 小牧近江訳「シャルル・ルイ・フィリップ」『フィリップ全集 第三巻』新潮社、昭和五年三月、436頁。

(24) 片山敏彦訳「シャルル・ルイ・フィリップ」『ジイド全集 第九巻』金星堂、昭和九年四月、286頁。

(25) 中島健蔵訳「シャルル・ルキ・フィリップ」『ジイド全集 第九巻』建設社、昭和九年四月、253頁。

(26) このような特殊な「切る」の用例は、他の太宰の作品に存在するのだろうか。『作家用語索引 太宰治 別巻』(近代作家用語研究会編、教育社、一九八九年二月)の「作品一覧全語出現度数表」(200〜201頁)を用いて、作品集『晩年』(「ダス・ゲマイ

ネ、「富嶽百景」、「走れメロス」、「ヴィヨンの妻」、「桜桃」、「右大臣実朝」、「斜陽」、「人間失格」に出現する「切る」という単語を調べた。これらの作品に「切る」は二十一例確認できたが、「平面を切った」のように特殊な「切る」の用例はなかった。太宰が引用の際に、引用元の文章を変更して勢いを加える例としては、「猿面冠者」(『鶴』第二集、昭和九年七月)での、プーシキンの作品からの引用が考えられる。笠原伸夫氏(「猿面冠者」の方法『太宰治研究1』、和泉書院、平成六年七月)は、その引用元をメレシニコフスキイ「プウシキン……主観的批評……」(中山省三郎訳、『新文学研究』第六集、昭和七年五月)と指摘している。その評論の本文は次の通りである。二体何もの? たゞの真似事師か/氣にするがものもない幽霊か、/ハロルドのマントを着た莫斯科子か、/他人の癖の翻案か、/流行言葉の辞書なのか……/いやもう、もぢり言葉の詩とでもいつたあところかな、(179~180頁)。「猿面冠者」では、「そもそも何者。されば、わづかにまねごと師。氣にするがものもない幽霊か。ハロルドのマント羽織つた莫斯科子。他人の癖の翻案か。はやり言葉の辞書なのか。いやさて、もぢり言葉の詩とでもいつたところぢやないかよ。」とされている。初めの一文では、「二体」が「そもそも」に変更されている。続く部分では、「されば」という言葉の追加や「ただの」を「わづかに」に改める言葉の変更、体言止めへの変更が行われている。また、「ハロルドのマントを着た」という引用元の本文は、「ハロルドのマント羽織つた」と表現が変更され、「を」という助詞が省かれている。これらによって、言葉に勢いが加えられている。最後の文では、「ところかな」が「ところぢやないかよ」と、より特異な表現に変更されている。

(27) 注(1)に同じ。

〔付記〕引用は初出誌に拠り、旧漢字を新漢字に改めた。引用文に傍線・二重傍線・四角囲みを付したのは引用者である。

拙稿は、二〇一三年度同志社女子大学研究助成金「奨励研究」による。深く謝意を表する。

(本学講師)

太宰治「碧眼托鉢」におけるアンドレ・ジッドの講演『シャルル・ルイ・フィリップ』の受容







表B 【フィリップについての評論一覧表】

|    | 発表年月          | 『掲載誌』巻号<br>【または『単行本』、出版社】 | 論者〔訳者〕   | 論 題  |
|----|---------------|---------------------------|--|--|
| 1  | 大 10.2        | 『中央文学』第 5 年第 2 号          | 小牧近江   | シャルル・ルイ・フィリップに就て   |
| 2  | 大 11.10.3・4・5 | 『朝日新聞』東京朝刊                | 小牧近江   | 地から生れる芸術の要求 (1) ～ (3)  |
| 3  | 大 11.10.23    | 『読売新聞』朝刊                  | 吉江喬松   | 【月曜付録】大地の声 シャルル・ルイ・フィリップの十三年忌を前に   |
| 4  | 大 11.12       | 『新潮』第三十七巻第六号              | 吉江喬松   | 仏蘭西文芸印象記 (七) 大地の声——シャルル・ルイ・フィリップ   |
| 5  | 大 11.12       | 『日本詩人』第 2 号第 12 号         | 石川 淳   | シャルル・ルイ・フィリップの一語   |
| 6  | 大 11.12.2     | 『朝日新聞』東京朝刊                | 山内義雄   | クロオデル氏のフィリップ挽歌   |
| 7  | 大 11.12.10    | 『朝日新聞』東京朝刊                | 福田正夫   | 火を点じてくれたクロオデル氏への感謝   |
| 8  | 大 12.1        | 『日本詩人』第 3 巻第 1 号          | ボオル・クロオデル<br>[山内義雄]                                | シャルル・ルイ・フィリップ (詩)<br>シャルル・ルイ・フィリップ (評論)  |
| 9  | 大 12.4        | 『文章倶楽部』第 8 巻第 4 号         | 小島徳弥   | 現代世界文豪伝 (4) シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 10 | 大 12.5.11     | 『朝日新聞』東京朝刊                | 前田河広一郎   | 作家二十二人 五月の創作月評 (3)   |
| 11 | 大 12.5        | 『フィリップ短篇集』、<br>近代文明社      | 堀口大学   | シャルル・ルキ・フィリップ——訳者の序——  |
| 12 | 大 12.6        | 『文章倶楽部』第 8 年第 6 号         | 前田春声   | フィリップのこと   |
| 13 | 大 13.4.16     | 『朝日新聞』東京朝刊                | 中村星湖   | 四月号創作の読後 今や野蠻人が必要だ (2)   |
| 14 | 大 13.6        | 『南欧文学』第二号                 | 井上 勇   | シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 15 | 大 14.7        | 『貧と母と子』、至上社               | 小牧近江   | 跋にかへて (フィリップ漫筆)  |
| 16 | 大 15.5        | 『シャルル・ルイ・フィリップ』、<br>叢文閣   | アンドレ・ジイド<br>[近江谷駒【題<br>簽には「小牧近<br>江」と示されて<br>いる。】] | 一、シャルル・ルイ・フィリップ (講演)<br>二、シャルル・ルイ・フィリップ逝く<br>【「三、参考」として一覧表 8 のクロオ<br>デルの文章と、「シャルル・ルイ・フィ<br>リップと語る」(ジオルジュ・カルドネ<br>ル、シャルル・ヴェレ)、「アンドレ・<br>ジイドに与ふ(手簡)」、「シャルル・ルイ・<br>フィリップ著作年表 (初版)」を収める】 |
| 17 | 大 15.7        | 『文芸戦線』第 3 巻第 7 号          | 今野賢三   | 『シャルル・ルイ・フィリップ』を読んで  |
| 18 | 大 15.10       | 『ひ 新しき村』第 1 巻第 6 号        | クルチウス<br>[外山樸夫]                                    | シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 19 | 昭 3.3         | 『文章倶楽部』第 13 巻第 3 号        | 赤松月船   | フィリップの印象   |
| 20 | 昭 5.1.30      | 『朝日新聞』東京朝刊                | 宮島新三郎  | 読書ページ 野桜のパイプから   |
| 21 | 昭 5.2         | 『詩神』第 6 巻第 2 号            | 小牧近江   | フィリップの写真を見る  |
| 22 | 昭 5.3         | 『フィリップ全集 第三巻』、<br>新潮社     | 小牧近江   | シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 23 | 昭 5.9         | 『新ふらんす文学』、東京堂             | 広瀬哲士   | 八 シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 24 | 昭 5.10        | 『ふらんす』第 6 巻第 10 号         | 小方庸正   | シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 25 | 昭 9.1         | 『ビュビュ・ド・モンパルナス』、<br>新潮文庫  | 小牧近江   | 序  |
| 26 | 昭 9.4         | 『ジイド全集 第九巻』、金星堂           | 片山敏彦   | シャルル・ルイ・フィリップ  |
| 27 | 昭 9.4         | 『ジイド全集 第九巻』、建設社           | 中島健蔵   | シャルル・ルキ・フィリップ  |
| 28 | 昭 10.10       | 『小さき町にて』、岩波文庫             | 淀野隆三   | あとがき   |